

ヘーゲルの『宗教哲学講義』における人間論
——フォイエルバッハとの連関に留意しながら——
赤石 憲昭（一橋大学大学院・博士課程）

日本のヘーゲル研究において、宗教哲学講義はこれまであまり研究の対象とはされなかった。このことは、日本のヘーゲル研究が唯物論の立場によって主導されていたことも大きく関係しているように思われる。ヘーゲルにおける宗教的側面は、克服されるべき対象であったからである。しかし、ヘーゲルが「人間」についてどのように捉えていたかを考える場合、宗教哲学講義は非常に魅力的なテキストとなる。というのも、この宗教哲学講義は、数あるヘーゲルのテキストの中でも、「人間」という言葉が最も頻出するテキストなのである。もちろん、ヘーゲルは、神との密接な関係から「人間」について考察しているのであるが、「神が人間にとってどのようなものを規定している原理は、人間がそれ自身のうちにおいて、あるいは精神面においてどのようなものを規定している原理でもある」と考えるヘーゲルは、様々な宗教理解において、異なる人間存在の諸相を描き出しているのである。後にフォイエルバッハは、「神学の秘密は人間学」であると喝破したが、この宗教の考察の内には、人間に対する深い洞察がちりばめられている。しかしながら、更に立ち入って、宗教哲学講義における人間理解が探求されることはこれまでなかったのである。

そこで本発表では、この宗教哲学講義に見られる「人間」の記述に着目し、そこで展開されている「人間」把握について考察してみたい。ヘーゲルが様々な宗教把握の中に見いだす人間理解は、我々が現代において「人間」について考える場合にも有力な手がかりを与えるに違いない。中でも、特に、ヘーゲルが最高の宗教形態と考えたキリスト教においては、人間精神の最高の規定が見いだされるはずであり、特に重要となる。ヘーゲル哲学の核心は、普遍性、特殊性、個別性の統一体としての「概念」の形式に見いだされるが、その論理が「人間」把握においても貫徹されていることがここ見いだされるだろう。

テキストとしては、最も内容が充実していると言われている1827年の「宗教哲学講義」を中心に用い、必要に応じて他年度の講義録も参照する。考察は、ヘーゲルの議論を「人間」理解を中心に再構成することが中心となるが、その際、フォイエルバッハの宗教批判の観点も視野に入れながら、ヘーゲルの宗教哲学講義に見られる「人間」把握の現実的意味を明らかにすることを目標としたい。